

# 末黒野

すぐるの

12月号 (通巻844号)



# 秋彼岸

小川 玉泉

(名譽主宰)

秋彼岸墓域の供花を渡る蜂

海風に銹深まりぬ破れ芭蕉  
庫裏までは玉石の道曼珠沙華  
本堂の白木の階を秋の蝶  
秋彼岸墓域の供花を渡る蜂  
下枝なき喬松残り秋没日  
月光へ八重の花閉ぢ酔芙蓉

秋彼岸には秋の字を付けるが、春彼岸には春を付けない。両者は共に二十四節気の一つである。春と秋に訪れる昼夜平分の日をそれぞれ中日として前後三日間ずつ計七日間を彼岸会として先祖を祭ってきた。花粉を集める蜂には辛い季節になった。俳句では春彼岸を単に彼岸としている。

# 曼珠沙華

松本三千夫

雲を着る山一つなき秋暑かな  
齒科の椅子に四肢のこはばる白露かな  
台風過耳より大きイヤリング  
秋冷の目覚めや脚の痺り易く

灯を入る朝の仏間のひやひやと  
神官の砂利の杳音秋澄める  
神主の歩に纓の揺れ爽やかや  
曼珠沙華瀬音ひかりを弄び  
コスモスの風得て己煌めかす  
草ながら見上ぐるほどの紫苑かな  
虫の音のはたと止みけり来るは誰たぞ  
尼寺の一打一韻秋深み

# 花野道

黒滝志麻子

(副主宰)

島めぐる海の蒼さや処暑の風  
新涼や下駄も箆笥も桐細工  
花野道ひかりまみれの童くる  
堰落つる水やや濁り稲雀  
無造作に積みて藁塚崩れざる  
畦川の泡立ち堰くや草の花  
遅速なく刻む水車や稲穂風  
薄紅葉山まるやかにけぶりをり  
甘藷掘る園児の大き軍手かな  
千年の杉や櫟や小鳥来る  
雨の日のこんにやく畑つづれさせ  
ひと雨の草に残りぬ虫のこゑ

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 晩夏

安齊久英

看護師は吾子の教へ子火取虫  
高階の灯火晩夏の星掴み  
入院の足かけ三月秋灯  
心して食む銀舍利や敗戦忌  
八橋に雨意の風過ぎ藤は実  
台風の事なきを得て白陀師忌  
病床にも病衣にも馴れ秋立ちぬ  
吹けばとぶ十貫の身の残暑かな  
足早にナース行き交ひ秋深む  
点滴の遅々と軒打つ秋しぐれ

## 懺悔室

石黒興平

緑蔭や白き聖衣のマリア像  
校塔の時計にはなし夏休み  
大花火みなどみらいを揺さ振りぬ  
教会の堅き木椅子や秋涼し  
香煙のまつすぐあがる残暑かな  
鳶職のだぶだぶズボン処暑の風  
教会の石柱の艶涼新た  
身に入むやまことに狭き懺悔室  
碧空を背負ひて歩荷花野ゆく  
三更に虫の浄土となりにけり



母 郷

田中臥石

月山の雪溪にまづ吐息洩る  
鯖雲や地球離るる航空機  
鹿鳴くや遠忌の齋の窓近く  
葡萄挽ぐ指先に見る蔵王かな  
蠅螂も蔵王へ向きて母郷かな  
蔵王より月山望む秋澄めり  
月山へ登る秋冷纏ひつつ  
娘来て稲の不作を嘆きをり  
種籾を得るためだけの青田刈  
猫寄りて来たり名月待ちの膝

秋 日

森清堯

朝戸出の下駄の湿りや今朝の秋  
切れ切れの記憶をつなぎ敗戦日  
新涼やチツプの厚き遊歩道  
饒舌の孤独を隠し秋風裡  
堰落つる水に秋日のかけらかな  
秋気乗せ山気乗せたる早瀬かな  
葛の葉のうねりに遅れ溪の風  
渋滞のいつしかほぐれ鱗雲  
襷多き御嶽の裾霧動く  
五階まで闇をせりあげ虫しぐれ

# 水澄む

森清信子

湖の置く山影著し蟬しぐれ  
鳥の寄る妻籠の水場秋暑し  
溪流の大石小石鬼くるみ  
溪流へ鎖伝ひや山葡萄  
底の透く淵の碧さや沢ききやう  
溪流に放つ笹舟石たたき  
碧潭へ一筋の日矢桐一葉  
水澄むや樵の倒木苔むして  
県境の峠の霧やけらつつき  
山襞の影深ぶかと秋没日





# 乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）



観月会

堺

昌子

見はるかす稲の穂波やちぎれ雲  
梨売りやひとつおまけの声飛ばし  
紅木槿ひと日の色を咲ききつて  
夕照やむれてかがやく秋あかね  
空深し蓮の実まさに飛ぶかまへ  
妣ときし想ひあらたや観月会  
大池や風にさからふ秋の蝶

旅の膳

吉田きみえ

蟬声に目覚めぬ明けの月の暈  
照りかぎり白壁の端の青胡桃  
障子貼る母の口伝の糊加減  
台風の余波の雨過ぎ照り返し  
子や孫と灯火親しみ旅の膳  
水はしる岩のきらめき秋つばめ  
葬果てて家路急ぎぬ月明り

秋の海

今村千年

しばらくは波止場に坐しぬ秋の海  
水道を行き交ふ巨船秋の雲  
三分の渡しの舟や秋の潮  
海に沿ふプロムナードや秋夕焼  
どんぐりやもうすぐできる逆上がり  
色褪しモノクロ写真虫の夜  
ちちろ鳴く築百年の通し土間

# 青炎集

## 松本三千夫選



横浜 椎名文子

夕潮に棹さす渡し大南風  
真夏日の夫の頷く長電話

### 世話人の店主拳つて踊の輪

抜け道の竹の百千涼新た  
走り根の谷戸の小路や昼の虫  
町川の浅き流れや秋の声

横浜 久保田優子

### 座して抱く九人目の曾孫爽やかに

白桃供へこまごまの事思ひ居り  
身に入むや老いの一日の予定表  
噛み合はぬ子との思ひのやや寒く  
梨喰みて夫の笑ひを目の辺り  
おけら鳴くを己に告げて眠りたり

横浜 小池みな

### 我在らん限り続けん門火焚き

新涼や今日再三の俄雨  
焼秋刀魚色こんがりとマーケット  
糸のこ草土手に揃ひて風ゆたか  
茂る葉の中をひそかに葛の花  
秋の水肥満の鯉の集ひけり

新宿 稲垣佳子

### 肩籠の反故のつぶやき夏の果て

みんみんの耳の奥まで試歩の朝  
バス停の不揃ひの椅子カンナ燃ゆ  
秋草を束ね土瓶へ蕎麦処  
鉛筆の芯を尖らせ秋ともし  
廃校の残る鉄棒小鳥来る

横浜 占部美弥子

新涼や遠目に青き山の巒

**目瞑れば石庭に生る秋の声**

今日の日へ花をたたみぬ白木槿

通り雨濡れて品良き秋海棠

花巻の星の煌めき賢治の忌

流れ藻の美しきに見入り秋惜しむ

横浜 神谷さうび

**送り火や燃え盛るとき皆黙し**

塔頭の門扉全開秋涼し

秋涼し弁天島へ小さき橋

大屋根の反りゆるやかや鳥渡る

日蓮の説法像や小鳥来る

伝言板廢れて久し小鳥来る

横浜 土田 亮

手花火や開け放たるる里の縁

落蟬のちちと一声宮の磴

**盆帰省駅舎に残る台秤**

声高な汀の会話盆の波

雛僧の素足忙しき施餓鬼寺

休暇明下校児の影伸びて来し

横浜 外山節子

秋蝶や我が先を行く試歩の道

顔けるのみの返事や秋暑く

秋茄子の小ぶり侮り刺されけり

気に入りの傘をおちよこに台風禍

言ひさしの愚痴呑込みぬとろろ汁

**燃え盛る火のごと辛し唐辛子**

横浜 鍋島武彦

街路樹の風のさやぎや秋めきぬ

溜息は母の安堵か敗戦日

灯り初むるみなどみらいや涼新た

初秋刀魚を肴に友と宴かな

母卒寿あれこれ仕切る盂蘭盆会

**昨夜竿灯今宵佞武多や一人旅**

横浜 上月智子

静かなる雨に烟るや遠花火

八千草や母逝きてより十二年

里山の変はらぬ姿門火焚く

魂送たちまち焰立ち上り

秋霖や谷戸の小径の水溢れ

**相輪にかかるすぢ雲鳥渡る**

# 耕 土 集

## 黒滝志麻子選

蘆花偲ぶ秋の海辺の碑文かな

横浜 宮崎他異雅

落鮎や友に鼻眞の酒肆ありき

蘆原やかそけき風の渡りゆく  
行合ひの空や山辺の思草

遅かりし右も左も虚栗

ビル街の丘の公園花芒

老いらくの二人見上ぐる星祭

にぎはひの駅前広場秋茜

朝寒の慌て着換へる下着かな

秋の灯や運河に揺らぐ倉庫群

かなかなや跡目絶えたる家屋敷

三鷹 小林 清彦

堪へ性稀薄となれる残暑かな

風渡る猿島にはや赤蜻蛉  
午後五時を過ぐれば無人秋の声

道すがら捻る言の葉白露の日

願はくは一に健康ゴーヤ瓜

気紛れは秋空の所為旅歩き

箸進むやはり道産栗南瓜

移ろひのとき知らせむと鉦叩

秋うらら野辺の双体道祖神

垣越しに秋めく言葉交しをり

横浜 邑田のり子

まとまらぬ俳句を離れねこじやらし

朝焼けや夜の帳をひとめくり  
日記帳文月の頁二三行

秋灯下辞書を貧り句を作る

長崎忌すなはち妻の誕生日

友逝きて心静かに月仰ぐ

水団を好物の子ら敗戦忌

校庭の松を見てゐる良夜かな

赤蜻蛉草刈る人の背をかすめ

長田 厚子

飯田久美子

加藤 昌安

